

戸川秋骨

「虞美人草」

「虞美人草」

新聞に出終ったのはおよそ一と月半も前のこと、一冊にまとまって公にされるのは、やがて一と月後のこと、いずれから見てもすこぶる半間な場合であるが、「虞美人草」を読んで感じたことを述べる、あえて批評とは言わぬ。

「虞美人草」を読みはじめた時、なんだかジョージ・メレデイスでも読むような心持がした。その後人伝ひとづてに、著者は「虞美人草」に筆を着ける前に、メレデイスを精読

したということを知った。はたしてそうであるかいなか知らぬが、とにかくメレデイスに近いような気がしたのである。しかし「虞美人草」ははるかにメレデイスよりは読みやすい。これは国語が違うゆえばかりではない。メレデイスの考えのほうがか少し変手古へんてこにできているからであると思う。「虞美人草」に対しては、むずかしいという非難があつた。いかにもそれは難解であるが、しかしこの思想の点から考えて余よはモウ一と息むずかしくしてもらいたくあつた。難易は良否の問題ではない。非難を加えるべきならば、それは別の点にあるのであろう。

メレデイスのは良く解らぬが、「虞美人草」の難渋のところには少しスポンタネーテイ自然の趣の欠けているように思われる。理屈をいうのが少し窮屈に感じられる。これもメレデイスのと哲学が異ちがうからであろう。

著者に「猫」のあるのは、メレデイスに「シヤグパット」のあるのと同じであろうか。メレデイスの「シヤグパット」は傑作である。「猫」も傑作である。しかし両家の哲学の異つているところは、この両書の相違で解わかる。もつとも両家を比較するのがそもそも間違っているのかもしれぬが、「虞美人草」を読んで、少くともじゆうかいの渋晦

な工合が似ているように思われたため、ついこれまで比べたのである。

さらに思いついたことをいうと、宗近君と藤尾さんとを、甲野さんの家で、誰れたもない時に、対席つきあわしてみたという、我ままな注文がある。その場合宗近君の調子がどんなであろうか。ちよつとそれを襖うしろの背後から聞いていたいというのである。これは真ほんの好こう「この間脱字」宗近君の臆面なく口外する「この間脱字」癩しやくにさわって、それが彼の最後のカタストロフに行く一因になれるというのも、無理なことではなからうかと思われる。

描写の精細なところは心持が良い。このごろの多数の作家は、書けないためか、しょうひつ省筆という都合の宜よい筆法でか、何事も輪郭ばかり書いているようである。「虞美人草」の筆ははなはだ細かいので有難い。もっとも細かいが良いとばかりはいえぬ、一筆で真相があらわ顕せればそれに越したことはあるまいが、多くの作にはそれが顕あらわれなないのである。

「虞美人草」のある部分の描写は「浮雲」以来初めて接したような心持がする。たとえば甲野さんが、西洋室でテーブルの上の紙片にうろこがた鱗形をいくつ幾個となく書くところな

どはそれである。宗近君が来て甲野さんと庭を歩く、電光石火のように縁先きの藤尾さんの手に金時計の鎖が光るなどは、少し芝居がかっているが、印象は明らかである。

しかしなお、おりおり印象が明瞭を欠くのはどういう理由であろう。西洋の立派な作は言語の異っているにかかわらず、精細な叙述でも印象が明らかであるに、日本ではかえってそうゆかぬとは不思議である。これは「虞美人草」のある場所についていうのであるが、今の作者についていえば、幾時叙いくらしてもなんらの印象を与えない

のが多い。これは日本の言語が悪いためでもあるだろうが、しかしながら「源語」などを読んでみると、そうでもないようである。もつとも「源語」時代と今日とは言語も変り、思想も変っているから一概にはいえぬが、このことは少し注意すべきことであろう。

「虞美人草」の教うる教訓も結構である。道德や教訓を口にするのは、文芸上の異端かもしれぬ、時勢後れおくかもしれぬ、しかし異端でも時勢後れでもかまわぬ、面白いのは面白い。ことに近ごろは肉情文字に恐縮している。いくら理屈があっても、こればかりは恐縮する。理屈が

あるからなおさら恐縮せざるを得ぬ。余はあくまで「虞美人草」に見えるような道德教訓にうちわ団扇を上げる。

(明治四〇・二一・一七「東京朝日新聞」)

日本文学電子図書館

「虞美人草」

著 者 戸川秋骨

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 4 卷」角川書店
昭和41年 4月20日 7版発行

日本文学電子図書館